不思議不可視議相談所

人見

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
不思議不可視議相談所

【Ｎコード】
Ｎ６５９５Ｄ

【作者名】
人見

【あらすじ】
世の中には不思議なことや、見えないものが多過ぎます。そんなものが貴方に襲い掛かってきたら？諦める前に“不思議不可視議相談所”に御一報下さい。是が否でも、なんとかしてみせます。

Ｆｉｌｅ１：日本語の乱れ～前編～

規則正しい振動が体を揺らす。
向かいのサラリーマンも、斜向かいのお姉さんも、隣の学生も。
この空間にいる全ての人間が椅子に座り、一様に振動に身を任せていた。
時刻は正午ちょっと前。横一列にずらっと並んだ窓から陽光が優しく注ぐ。

あーいいな。と少女は素直に思った。
目鼻立ちの整った紛れもない美少女。だが綺麗と表現するよりは可愛いの方がしっくりくる顔立ちだ。
うん。と少女は胸の中で一人頷いた。
こーしてると、自分は紛れもなく此処に在るなぁ。
行き先は違うけれど、皆が同じ振動に身を預けて同じ方向に進んでいるなんて、なぁんかいいなぁ。
漠然と少女はそう思った。

タタン、タタンと二拍子。
規則的に響くその振動は、静寂では決してないけれど、静かな空間に心地よいリズムを刻んでいた。

不意に大音響の電子音が静けさを破る。
最新の流行に則った着うた。
辺りを気にかけようともしないノリの良い歌声に、周囲の人々は眉をひそめた。
「あーもしもし？」
横に長い座席の中央辺りに座る若者が喋り始めた。
よく見かける私立の高校の制服を着崩して、髪は茶色と金に染めて

ある。
その制服にある学校の名前と、着こなし、髪の色から、馬鹿っぽそうな雰囲気を醸し出している。
「あ？うん。そーだよ。今電車。あ？あぁ。後2、３０はかかるな。あ？うっせー。しかたねぇだろ。」
歌声と同様に声高らかに会話を続ける。
早く切れオーラが漂う中、若者は会話を続けた。
「お前があんな遠いとこを言うからだろーが。」
彼の向かいに座るおじさんが咳ばらいをするが、若者は気付かない。
「それよりお前ちゃんとゲーム持って来てくれたんかよ。あ？お前持って来てつったろうが！マジありえねぇよ。お前死ねよ。」
隣に座るおばさんがジロッと彼を睨む。
「あ？お前が死ねよ。……いやお前が死ね……いーやお前だ。……お前だ、お前が死ね！」
口角沫を飛ばして若者は叫んだ。
最終的に、うぜー。とにかくまだかかっから。と言い残して彼は通話を終えた。
車内は一気に嫌な空気に満ちた。
優しく注ぐ陽光が、場違いに感じる程に。

なんかイヤな感じ。こんな所で死ねとか……。
あーもぅ。やんなるなぁ……。
少女も顔を雲らせた。

事情を知る由もない車掌が、のんびりと次の駅名を告げた。

◇

電車を降りた後になっても嫌な気持ちは拭えずに、少女は仏頂面で街を歩いた。

もう、何なのあれ、ちょっとは周りの迷惑も考えなよね！
と、心で叫ぶ。
鼻息荒く歩を進め、向かった先には“万、人生の悩み事お聞きします。”と看板を掲げるビルがある。
五階建ての貸しビルの三階の一角、何とも人を食った看板を掲げるそこが、少女の目的地だ。
名前を“不思議不可視議相談所”と言う。

「はい、いらっしゃ……。何だ、千歳（ちとせ）ちゃんか。」千歳と呼ばれた少女は、部屋の奥にドアを向いて置いてある机に向かって、ぷうと頬を膨らませてみせた。
「何だはご挨拶ですね、佐竹さん。」
言いつつ後ろ手にドアを閉める。
「ちょっと、佐竹さん……。」
と、呼びかけながら千歳は部屋を見回した。

十畳程の部屋は、四辺のうち二辺が窓という開放感抜群の角部屋だ。しかし、この部屋の残り二辺は、一面天井まで届く本棚に覆われている。つまり、この部屋では壁と本棚は同義語で、多少の圧迫感は仕方ない。
そして、ドアの向かいの辺、窓の近くにステンレス製の佐竹さんの机がある。中央にはソファー等の応接セット。他に、テレビやエアコン、コピー機が点在する。
二人きりで使うには少し贅沢な事務所だった。
しかし、今ではそんな感想は全く持てない。
床に直にものが積み上げられていたるのだ。
膝の高さから腰の高さまで様々で、ファイルだったり、バインダーだったり、プリントだったりと種類もバラエティーに富んでいる。
一階に共同玄関があって、土足ではないと言っても、これは異様だった。

何より歩きずらい。ちょっと間違ったら崩しそうで、千歳は恐る恐る佐竹さんに近付いた。

やっとの思いで佐竹さんに近寄ると、千歳は佐竹さんに言った。

「これ……。また随分小汚くなりましたね……。」

「失礼な。これは秩序ある乱雑さなんだよ。」

平然と返す佐竹さん。

「それは矛盾してますよ。」

「そういえば佐竹さん、聞いてくれます？」

応接セットに在宅模試を広げて、千歳が訊いた。

「どうしたの？……それは？」

手元の作業から顔も上げずに会話を続ける。

「これは在宅模試ですよ。……それでですね、今日此処に来るとき……」

模試に“県立波斗（はと）高校一年七組柳原千歳（やなぎはらちとせ）”と書いて手を休める。

「来る途中ですごい嫌なことがあったんですよ。」

と話しを続けた。

「災難だったね。どんなこと？……あ、ねえ、そこから左に三、右に二番目のタワーの、上から五番目のバインダー取って。」

話しを聞いているのか、いないのか佐竹さんは淡々と返した。

「え、全部何処に何があるか解ってるんですか？……これですね。」

“学問（がくもん）大准教授佐竹（さたけ）未雪（みゆき）”と書かれた緑のバインダーを手渡す。

「ありがと。……それで？」

先を促す佐竹さん。

「はい、それが……」

しかし千歳の声は突然止まる。

ニュースから不意に聞き慣れた地名が飛び出したからだ。

ニュースが入りました。本日正午近く、波斗駅、井斗(いと)駅間を走行する列車の中で、私立白稜(はくりょう)高校の男子生徒が死亡しました。男子生徒が直前に電話していた男子生徒もまた、同時刻に死亡したことを受けて、警察は自体の関連性を調べています。

流石にこのニュースには佐竹さんも手を休めて馴染みのキャスターを凝視する。

「この電車にわたし乗ってたんですよ……。波斗、井斗間って、わたしが降りた直後じゃないですか……。」

千歳の声はショックを受けている様で、実は遠い非現実的なニュースに対する坦々とした反応だった。

「うん。よく分からないけど、千歳ちゃんも気をつけてね。」

返しす佐竹さんも坦々としたものだ。目線は手元に戻っていた。

現実には悲劇が溢れている。

もし千歳が、その電車に乗っていればまた違う反応をしただろう。

しかし液晶画面を通すと、途端に事実は非現実的になる。

子供が親を殺した事件の後に、高校生が死亡して何だと言うのだ。

一々気にかけていたらこちらの身が持たない。

だから無視する。

自然なことだった。

◇

高校生死亡事件の翌日、千歳の通う県立波斗高校は終了式が予定されていた。

「あーもー。終了式なんて面倒だよ。さっさと通知表貰って帰りたい。」

一年七組教室ではある女子がそう愚痴を垂れている。

「そーそー。得に校長の話しが辛いよね。なんだかよく解んないことだらだら言ってさ。」
あれがなければまだいいのにさぁー。と声をあげる。
同調する周りの女子。
「あのハゲ、もっと髪生やせよ。さもなくば骨折でもすればいいのに。」
そー。笑いを堪えるのに必死だよ。と周囲が沸く。
「骨折の心は？」
「何か、転んだだけで骨折れそうじゃん。そうすれば壇上に出てこなくなるかな、と。」
一層周囲が沸き立つ。
うん、骨折すればいいんじゃない。と、幾人もの女子に伝播した。
やがて三々五々生徒は講堂に向かい始める。
その中に千歳もいた。

「校長挨拶。」
司会の言葉が講堂に響く。
講堂にはシートが何枚も並べて敷いてあり、椅子が並んでいる。
司会の言葉を受け、校長がすっと立ち上がり、壇上に向かった。
齢六十を超す名物教師。転んだだけで骨折りそう、と言われていたが、その足取りには迷いがない。
完璧に堂に入った姿勢に、周囲はただ圧倒される。
だが、それ故に次の瞬間の出来事は信じられないものだった。
ゴカン！とも、ビタン！とも着かない音と、ボキッとの嫌な音を立てて校長は、床に倒れ伏した。
躓くような物は何もない。
校長はしかし、ばったりと見事なまでに転んでみせたのだ。
しかもその後が悪かった。こともあろうに脚をかかえてうずくまってしまったのだ。
予想外の展開に周囲は慌てふためく。

「骨折したかもしれん、救急車を！」等、声が飛び交う。
一年七組の連中はその騒ぎの中、言葉を失い立ち尽くしている。

「先程近辺で虎、馬、鹿が確認されました。現在行方を捜索中です。皆様十分注意して下さい。」
外から拡声器の声がした。

Ｆｉｌｅ１：日本語の乱れ～前編～（後書き）

初めまして。新参者の人見と申します。この度はこの散文にお目をお通し頂き、ありがとうございます。今回は初めてということで、投稿までの流れを掴もうと、前後編としております。出来るだけ早く後編も書きますので、宜しくお願いします。

Ｆｉｌｅ１－２：日本語の乱れ～中編～

「……ってことがあったんですよ。」
その後何だかんだで終了式は校長挨拶を欠いて進み、無事千歳は一年の授業を全て終え、春休みへ突入した。
「へぇ～。結局校長先生は無事なの？」
応接セットで千歳と向き合って座り、缶コーヒーを啜りながら佐竹さんが訊く。
「無事も何も、左足を骨折だそうで。でも、直ぐに病院行ったみたいですし、大丈夫だと思いますよ。」
にこやかに千歳か答える。
あの堅物校長が骨折したことは、初めのうちこそ悼まれ、朝の会話を悔やまれもしたが、すぐに笑いの種になった。
「そうか。千歳ちゃん、」
不意に佐竹さんが真面目な顔つきになる。
「？」
ずずっとコーヒーを啜る千歳。
「君達は朝、校長が骨折すればいい、と笑い合ったんだよね？」
「そうですよ。まさか、わたし達がそう言ったから骨折したとか、言いませんよね？」
急に真面目になった空気を和らげようと、笑いながら千歳が答える。
「そのまさか、だよ。」
佐竹さんは笑わない。
千歳の顔から笑みが掻き消えた。
「ちょっと面白い話しをしよう。実は今日ね、」
佐竹さんはそう言って身を乗り出し、膝の高さ程のテーブルに肘を着いた。

◇

佐竹が道を歩いていると、近所の公園から子供の声がした。
ほほえましさに頬が緩む。
「あ、猫だ。」
がき大将っぽい子供が声をあげる。
「ねこだ。」
「ホントだネコだぁ。」
「しましまだね」
「とらねこって言うんですよね。」
「虎か、強そうじゃねーなこいつ」
と一瞥してがき大将が言う。
「トラなのぉ？」
「とらねこ？」
「トラ？」
「虎猫だ。」
「とら？」
「虎なの？」
言葉が、
「とら？」
「ネコ？」
「猫？」
「トラ？」
「虎猫」
錯綜し、
「トラ」
「ねこ」
「猫」
迷走し、
「とら」
「猫」

「ねことら」
「とら」
絡み合い、
「虎」
「とら」
「トラ」
「猫」
「虎」
そして、一陣の風が吹いた。
しばらく先を進んでいた佐竹がぱっと振り返ったときには、公園はパニックに陥っていた。
「虎だぁ！虎がいるぞ！」
「逃げろぉ！」
「急げぇ！」
「喰われるぞ！」
「あたしの赤ちゃんがぁ！」
「押すなぁ！」
街を人が疾走する。
佐竹も人波に揉まれ、進めない。
「こっちに来る！」
「やめろ！」
「来るな！」
「あっち行け！」
「死にたくない！」
「違う！」
「警察を！」
「自分は！」
ノイズの様に何か、聞こえる。
「警察を呼べ！」
「そうでは！」

「虎がいるぞ！」
「ない！」
「あたしの赤ちゃん！」
「もっと正しく！」
「店を！」
「使ってくれ！」
「店を閉めろ！」
「自分を！」
「わかって！」
「正しく！」
「自分を！！」
「正しく！！」
虎の唸り声がする。
パトカーのサイレンが、遠くに聞こえた。

◇

佐竹さんはぐいーと缶コーヒーを煽った。
「今の……実話ですか？」
恐る恐る千歳は訊いた。
「実話だよ。」
佐竹さんは淡々と答えた。
「そう言えば、虎、馬、鹿にご注意って言ってた……。」
千歳が呟く。
「馬、鹿ってのは、何処かで馬鹿って言われたのかな？」
あまりの愚直さに佐竹さんは笑ったが、千歳はそんな気分になれなかった。

点けっぱなしのテレビでは、漫才師がお客さんを笑わせている。
「～やろ？」

「何でやねん！」
「せやから、辛いんやろ？」
「どっちや」
「辛いねん。」
「だぁからどっちや！」
「同じやろ」
「違うっ！辛いと辛いは断じて違うわぁこのハゲ！」
直後、相方の髪がねこそぎ落ちる。一瞬驚愕の表情を浮かべた漫才師だが、お前がハゲ言うからハゲたやんけ！んなことがあるかぃ！と、転んでもただでは起きない。
「佐竹さん……。これ、も……？」
「そうだろうね。」
鷹揚に、佐竹さん。そして言った。
「気をつけてね、千歳ちゃんは“不可知なるもの”に敏感だから。」
窓の外を夜風が駆ける。
千歳には、その音が哀しい叫び声に聞こえた。

◇

翌朝千歳が学校に着いたとき、普段仲の良い二人が大喧嘩を繰り広げていた。
「だからお前はそうなんだよ！」
「あ？それどういう意味だよ！」
「そういう意味だよ！」
「だったらあんたもああだろうが！」
「あ？お前巫山戯んなよ！」
「あんたこそふざけるなよ！」
最初のうちは痴話喧嘩と囃されてこそいたが、次第に激しいものになっていく。
「もういいよ！お前失せろ！」

「じゃあ、あんたは死ねば！」
「お前は失せろ！」
「あんたは死ね！」
「さっさと失せろ！」
「今直ぐに死ね！」
「俺の視界から失せろ！」
徐々に、
「この世の為にならないから死ね！」
言葉が、
「お前こそこの世から失せろ！」
絡み合い、
「あんたが独りで死ね！」
錯綜し、
「死ね」
犇めき合い、
「失せろ」
膨らんで、
「消えろ」
渦巻き、
「お前なんか、！」
手元を離れ、
「あんたなんか、！」
制御を失って、

千歳の中にキャスターの声が蘇る。

『走行中の電車の中で、男子高校生が死亡しました。』

「「死んでしまえ！！！！！」」
暴走。そして、一陣の、
「辞めてぇ！！」
突如、悲鳴が罵声を破る。
柳原？！と、声が上がった。
「辞めて、もう辞めてよ……。聞きたくないよ、そういうの……。」
千歳の目元に光る雫を認めて二人はぎょっとした様な表情になった。
千歳の、膝が、がくがくする。左手、左手が……熱い。
「千歳……。」
心配した誰かの手が優しく肩に置かれた。
ふっと安堵して力が抜けた千歳は、ぺたん、と床に座り込む。
「もう辞めろよ。」
声が挙がった。
そうだよ。辞めなよ。冷静になれよ。もう十分だろ。
周囲が同調しだす。
観念したように、二人は肩の力を抜いた。
刹那、千歳の脇を風が翔け抜ける。
憑き物が落ちたように笑う二人を囲む様に輪ができ、千歳は風のことを、忘れた。

◇

いつもの様に千歳が相談所の戸を開けたとき、佐竹さんがテレビにかじりついていた。
「今日は。……佐竹さん、今日……」
喋り出した千歳を佐竹さんが手招きでテレビの前へ呼んだ。
「よくないことになったよ。」
佐竹さんは千歳を無視して話し始める。普段佐竹さんは人の話しをよく聞く人で、人の話しを遮り、無視することなんてそうそうない。
それだけに事の重大さを感づいた千歳は佐竹さんの横に立った。

「まずいよ……。この手の番組じゃマイナスの言葉のオンパレードだ。」
番組では討論が開かれていた。偉そうな教授や、若い芸能人が熱く語り合っている。
題名は“迫る地球温暖化！人類の明日はどっちだ！？”
けんけんがくがくと討論が進む中、“人類は滅亡”とか“国が沈没”とか“デング熱が北上”とか、あわやという言葉が次々と飛び交っている。
「ど…うしましょう……佐竹さん？」
千歳の声が裏返った。
「言霊を止める。」
素っ気なく感じる程端的に佐竹さんは答える。
「はぃ？」
千歳の声が再度裏返るが無理はなかった。
それを佐竹さんがどう取ったのか、話し始めた。

平安時代より古来、日本は言葉に宿る霊力によって、言葉通りの事象が齎されると信じて来た。
『言霊の幸ふ国（ことだまのさきはうくに）』とまで言う程のことから、それがよく判る。

「それくらいは死ってますよ。その言霊を止めるってどういうことですか？あれは信仰なんでしょう？止めるもなにも人でも…霊でもないのに！」
徐々に憤る千歳を宥めるように、佐竹さんが手を振った。
「だけど、“不可知なるもの”だよ。」
そして言い切る。
その言葉に千歳はびくんと体を震わせた。
「そんな……。ことが……。だって、そうならわたしが……。」
しかし脳裏に浮かぶは、泣き崩れた時の記憶だ。
あの時自分の脇を翔けたものは？

普段中の良い彼らの大喧嘩は？
終わった後の憑き物が落ちたかの様な表情を忘れたか？
内から声がする。
それは、疑問として浮かび上がった。
「気付かない、訳がない、かい？」
悪戯っ子の様に佐竹さんは笑う。
左手が、熱い。
「何、で……？佐竹さんは……？」
「心霊科学部准教授は伊達じゃないよ。」
佐竹さんはそう言いつつパソコンを起動させる。
続けて開いたファイルには今回の『男子高校生死亡事件』よりこっち、千歳が預かり知らぬ事件までが細々と記載されていた。
「全国のニュースや、細かい住民ネットワークを漁ったけど、言霊のおこした事件の様なものは、『死亡事件』が初めてみたいだね。」
佐竹さんが、あっちの本屋にはなかったよ。と同じような口調で告げる。
「と、言うことは、言霊は、」
掻き回され、しかし勢い込む千歳。
「まだこの界隈にいるということですか？！」
そうだろうね、と冷静に佐竹さんは頷いた。
「この討論会はテレビ局のスタジオでやってるらしい。ここからは大分離れてる。」
だから……と繋ぐ。
「今のうちに叩く。」
「え、それって、でも言霊は、」
うろたえる千歳に佐竹さんは頷いた。
「古来より、言霊は信仰の対象で、排除することはもとより、知ることも、知ろうとすることも禁忌だった。」
「だったら……」
叩くなんて、と言いかかった千歳を遮り、繋ぐ。

「説得しよう。」

争うことをよしとしない千歳の表情が満面の笑みへと変わった。

Ｆｉｌｅ１－２：日本語の乱れ～中編～（後書き）

（気が付いたら、一部は３３３３文字なんですね。驚きました。）思いがけず三部になりそうです。意志薄弱な私ですいません。お目をお通し下さり有り難うございます。よろしければもう一部お付き合い下さい。

Ｆｉｌｅ１－３：日本語の乱れ～後編～

◇

「そこで、だ。」
唐突に佐竹さんが切り出した。
正しく季節は春に向かおうとしている。
それは千歳の通う県立高校が春休みに入っていることからも明らかで、今朝のニュースでは桜前線の北上状況を伝えていた。
しかし、この波斗市内にある氏神、九十九神社の跡地に吹く風は凩の様に冷たい。
「そこで？」
寒さに身を縮めながら千歳が訊いた。
「神社に来てみたんだけど、何処に言霊はいるのかな。
佐竹さんがしれっと言う。
心なしか風が強くなった気がした。
「……まぁ、あぁ、そ、んなことですか！だったらいい考えがあります！」
「いい考え？」
怪訝そうにする佐竹さんの目の前で、千歳は日陰に残っていた雪を掬い上げた。
そしてそれをそのまま捏ねる。
ややあって出来上がった雪玉に向かって千歳は叫んだ。
「これはシュークリームだ！」
「……。」
冷たい風が、身に染みる。
「あのさ……。まだ春と断言するには早いんだし、変な人にならなくてもいいんだよ？」

「……。佐竹さんは……乙女心を判ってくれないのです。」
その千歳の呟きは佐竹さんの脆い部位を、ピンポイントで貫き通した。
「っ……。」
何度言われたことか。その台詞。
例えようのない焦燥感が佐竹さんを支配した。
「例え雪玉でも泥団子でも、それがシュークリームになるのなら、その可能性に賭けるのが乙女ですよ？！」
「……そんな安っぽい乙女心はイヤだ。」
不意に千歳が頭を鈍器で殴られたかの様に顔を歪める。
「いや……なんだか、御免。謝るからそんな顔しないで。」
しどろもどろになった佐竹さんに、千歳は手を振った。
「やだなぁ、いいですよ。と言うより、悪ノリしてすいません。」
「……して、その真意は？」
「はいっ。これがシュークリームに変われば、言霊が何処にいるのか判りますよ。」
「……成る程……。力が何処から来るかを見極めればいい訳だ。」
「はいっ。だから……これはシュークリームだっ！！」
瞬間、号音と共に神社の社の賽銭箱をひっくり返しながら、一陣の風が飛び出す。
小銭が飛び出し、賑やかに音を立てた。
そして風は千歳には目もくれずに何処かへ翔けて行った。
「あそこにいる様だね……。」
「……これはシュークリームだっ！」
「もう居場所は判ったんだけど。」
「それでもシュークリームは回ってる……。」
「回ってるのは地球。意味不明なことを言わない。……後で買ったげるから。」
「ホントですか！？聞きましたよ！その言葉。」
佐竹さんは何も考えずにそう言ったことを後々後悔することになる。

「……行こうか。」
「はいっ！」
そして二人は本堂へ歩みを進めた。

◇

社には訳無く入れた。
賽銭箱が号音を立てたときに人が全く出て来なかったことからわかっていたが、所詮此処は跡地、霊御形（みたまのみかた）を移された抜け殻だ。
「元は神がいた場所、空き家だからね。言霊がいるかもと踏んだんだよ。」
と、これは佐竹さんの弁。
千歳はしかし、聞いてはいなかった。
左手の甲から肘にかけてが燃えるように熱い。
見ると、腕の外側に朱く刻印が浮きだしていた。
「佐竹さん……これ……。」
「やはりか……。」
佐竹さんもそれを見て顔をしかめる。
そして本堂の奥、本来なら霊御形が安置されているのだろう場所に坐る背中を、ひたと見詰めた。
「君が言霊か？」
「そうですが……。何でしょう？」
思いがけず若い声。しかも女性のそれだ。
「力を使うのを辞めて欲しいの。」
千歳が凛とした眼差しで言霊を見詰める。
言霊はゆっくりと、柔らかく振り返った。流れる様な黒髪がさらら、と広がる。
そしてそのままとん、と床に降り立つ。
はっとする程美しい、ぞっとする程艶やかな少女の象（かたち）で。
口元に微笑みを湛えて。

「……何で？」
真っ正面から千歳の視線を受け止めた。
「……何で、こんな人を殺す様なことをするの？」
質問を質問で返す千歳の言葉は、形こそ質問だが、明らかに非難の響きが込められている。
「べつに殺すことが目的じゃありませんよ？結果、死んでしまっても、私を咎めるのは、筋違いかと。」
「ならば、咎めるべき相手とは？」
ピシリと音を立てるくらいに冷やされた声色。
千歳は佐竹さんのこんな表情を見たことがなかった。
まるで、世界の全てに敵対するかの様な、威嚇を超越した声、それにそぐわない能面の様な笑み。
「殺すつもりはなかった。だから死んでも自分の所為ではない。と？」
「咎められるべきは、彼等です。」
言霊の顔から微笑みが消える。
「彼等が何の気無しに“死ね”とか、言うのがいけないのでしょう。」
同意を求めるかの様に言霊は首を傾げた。
「違いますか。古来より日本には、言ったことが現実になる、という認識があったのでしょ？」
「否定はしないよ。今も、ある。そういうこと。」
千歳が答えた。
例えば結婚式
例えば葬式
日常に刻み込まれた忌詞（いみことば）は現代に残る言霊信仰だ。
しかし、一般に、四（よん）は“し”だし、有りの実は“なし”だ。
言霊信仰はそんなに言う程世間には広まっていない。
それだけに、今になって突然言霊が力を使い出したことは明らかに不自然だった。

「だったらいいじゃないですか。“死ね”と言ったらホントに“死ん”だ。言霊信仰のそのままじゃない。」
「言霊信仰が始まって何年になるのかは分からないけれど、今になって信仰が具現化するのは異常だ。」
佐竹さんがぴしゃりと跳ね付け、将に本題となるべきことを、訊く。
「君は一体、何を考えている？何で今になって力を振るう？」
言霊はしかし、何も言わずに俯いた。
「・・・・・・。私は、解って欲しかったの。」
「「・・・・・・？」」
千歳と佐竹さんがさんが揃って妙な顔をする。
その間も、言霊は呟く様に続けた。
「最近になって、私は、日本語は随分と歪められた。その言葉の意味を考えもしないで簡単に“死ね”とか“失せろ”とか・・・・・・人を罵るだけの言葉だと思ってる。」
言霊はいやいやをするかの様に首を振った。
その度に、今にも暗闇に溶け消えそうな黒髪が、さらら、さららと揺れる。
その仕草は、何かを振り払うかの様な、それでも振り払えない何かに、絶望するかの様な仕草だった。
寂しい、と千歳思った。
この暗闇で、日本語の権化は、歪められた自分を見ていたのか。
こんなにも管理された社会の下、その言葉の表す事象を知らずに、軽々しく使われる自分を。
可愛そうだとも、哀しいとも思った。
「だから私は力を行使して私の存在を知らしめようとしたの。」
「軽々しく言葉を使うな。よくその言葉を、事象を知ってから使え。と？」
ぴしりと佐竹さんが言い放つ。
「簡単に言ってくれるなよ。言葉は生き物だ。・・・とまぁ、君に言っても仕方がないが・・・。」

少し言葉を濁しながらも、佐竹さんは続けた。
「その時その時に合ったものに変わっていくんだ。平安時代の言葉と、江戸時代の言葉、そして今の言葉は全く違うだろう？」
だから・・・・・・、と佐竹さんは息を継ぐ。
しかし、その言葉の先を封じ込めるように言霊の声が飛んだ。
「だから？！だから何？！だから諦めろと？！周りの人の言う様に、その方が便利だからその状（かたち）でいろと？！」
言霊は首を振った。体全身を使うように激しく。
そして願う。
誰もが願う、でも、手に入れることは難しい、人から貰うことも難しいことを。
「私はイヤ、そんなの！私を解って！本当の私を！貴方達の作った“私”に押し込めないで！」
千歳の頭に声が響いた。
今まで何度も、繰り返し言われ続けた、言葉が。
『千歳ちゃんなら』
『貴女らしくもない』
『流石は千歳ちゃんだね』
『貴女がそんなことを・・・・・・』
佐竹さんの頭に声が響いた。
今まで何度も、繰り返し言われ続けた、言葉が。
『君なら』
『佐竹ならこんなこと』
『佐竹らしくない』
『やはり君は乙女心が判ってない』
でも・・・・・・。
それは、泣いても叫んでも自分からは手に入らない。
しかも、心からそれをしてもらうこともまた、難しい。
千歳は思った。
我慢してもらうしかない、の、かな・・・・・・。

ひどく哀しい考えで、受け入れたくない考えだった。
我慢、するべきなのかな・・・・・・・
・・・・・・わたしも？

突然飛躍した思考を繋ぎ止める。
それでも脳裏にある女が浮かぶ。
あんたなら大丈夫だからといって冷たく突き放した女が。
「・・・・・・。ねえ、あなたは・・・・・・。わたし達があなたを好き勝手使うの、そんなに、嫌なの・・・・・・？」
「「？」」
佐竹さんと言霊の表情がシンクロする。
「わたし達が、あなたを勝手に歪めて、改竄(かいざん)して、それで、楽しく、お喋りするのが許せないの？・・・許してもらえないの？」
「それは・・・・・・」
思いがけず言霊は俯く。
ある景色が脳裏に浮かぶ。
千何百年と昔、自分が生まれた頃。
『滅多なことを言うな。』
そんな言葉が、言霊が生まれた切っ掛けだった。
次第に、その時その場所で合わない言葉を避けるようになっていく。
『婚礼の最中に“切る”など……。』
『此処は斎宮だ。“法”だ“僧侶”だと、神道を莫迦にしているのか。』
大抵、言霊が引き合いにだされる時は、双方いがみ合う時だった。
だから、生まれてこなければよかった、と思ったこともあった。
それだけに、彼等が、思いを相手に伝えられることを願った。
そうすれば、彼等がいがみ合うこともなくなると思ったから。
だから、彼等がお互い解り合い、笑い合うのを見るのは嬉しかった。
例え、日本語の権化である、自分自身が歪められていても。

彼等が解り合って、笑い合って、その為の誇りある日本語になろう。
と思った。

あれ？何で、何で私は……。私を使う彼等の笑顔の為には、歪められてもよかったんじゃないの？
ああ、そうか。今の“彼等”は、言葉を、罵る為に使って……。だから、だから……。

「わたし達は確かにあなたを歪めて、過大解釈したり、言葉を無くしたり増やしたり……。」
千歳は俯いて、それでも、日本語の権化に願った。
彼女なりの言葉で、歪められた日本語で。
「それでも、わたし達は話しをしたいの。お互いを解り合う為に、相手に思いを伝える為に。」
そこで千歳は苦笑する様に笑う。
「勿論、下らない馬鹿話も沢山して、馬鹿みたいに笑ったりもするけど……。」
「……あ……。」
言霊は、がつんと頭を殴られた気がした。
そうだ、彼等も、彼等だって、お互い解り合って、笑い合うのか。
江戸時代の“言霊指南”という本、自分の名前を冠したそこには、てにをはの使い方を始めとする文法事項がまとまっていた。
そこから比べて、今の日本語は随分と変わってしまった、と嘆いた。
自分を勝手に解釈しないで、と嘆いた。
でも、嘆くだけで、自分は気付かなかったんだ。
その時だって、自分が生まれた平安時代に比べれば変わっていたという事実を。
平成の今に生きる彼等だって、お互い解り合い、笑い合うってことを。
「そうだよね。彼等、君等だって、相手を解る為に話しをして、笑

い合って。私もそれを嬉しく思うんだった。」
不意に言葉を発した言霊に、千歳は驚いた様な顔をする。
言霊にはそんな彼女が急に愛おしく感じられ、彼女の笑顔、彼女を含む今の人々の為に、歪められても、いいかなと思った。
言霊は、照れ隠しに皮肉の様に口許を歪めて笑う。
「君等は人を罵るしかしないのかと思っていたよ。」
「失礼な。」
千歳が頬を膨らませ、それでも笑顔で。
そして、言った。
「それに、何と言われても、何と見られても、あなたはあなた。それを嫌になる気持ちはわたしもよく解る。だから、わたしが本当のあなたを、あなたの願いを覚えてるよ。」
「……ん、ありがと……。」
解ってくれる人がいるのなら、いいかな……。と言霊は呟いた。
彼等の為に変わっても、いいかな。それが、彼等の笑顔に、幸せに繋がるなら、それで。
社の外から、明るい子供の声が聞こえていた。

◇

言霊から風が起こった。
黒髪がぶわっと広がり、乱れる。
「じゃあさよなら、かな。もう合うことはないでしょう。」
言霊が髪の向こうで笑った。
「うん……」
「ちょ…ちょっと待って。」
泣き笑いの様な顔で千歳が言った言葉を佐竹さんが遮った。
「あ、佐竹さん。」
「あら貴女いたの？」
千歳と言霊のシンクロした台詞に佐竹は脱力する。

「いたさ……。何気に非道いね。地味に効くわ。」
しかし直ぐに復帰した佐竹さんは、真剣な調子で訊いた。
「最後に、これだけは教えて欲しい。」
「？」
「本当に君は、何故今になって力を？」
「ちょっと……佐竹さん……。」
焦って咎める千歳を言霊が手で制した。
「ごめんなさい。それは私も答えられない。気付いたら、今平成に生きる者に凄く腹が立っていたの。」
「……。」
急に黙った佐竹さんを千歳は気遣う様に見詰めた。
「気をつけなさい“不可知なるもの”を追う者。」
えっ？と素早く振り返った千歳に、言霊は手を振って、
「あ、待って！」
『それじゃあ、さよなら。』
一陣の風が吹いた。

こうして、男子高校生死亡事件以降の出来事に終止符が打たれた。

◇

『昨日、波戸市内の九十九神社跡地の賽銭箱が倒されているのが発見されました。
その神社は、昭和６０年、現在の波戸神社に移され、社等の設備等だけが残っていたもので、近所の住民が入り込んだ可能性み考慮して、市民会で捜査を進めて行きます。
青少年の溜まり場等とならないよう、波戸神社の住職とも話しを進め、今後の対応を模索していく予定です』
不思議不可視議相談所にはそんな書き込みがある回覧板が置いてあ

った。
千歳はろくに見もしないで、佐竹さんに声をかける。
「佐竹さん、この回覧板、もう三日、四日経ってるじゃないですか。回さなくていいんですか？」
「いいの、いいの。大してみんな待ってちゃいないし、回さなくても死にはしない。」
と書類の山が、ではなくステンレスの机の上に出来た書類の山の向こうから、佐竹さんが答えた。
「そーゆー問題じゃないかと……。」
ため息をついてから、千歳は回覧板に目を通す。
「……。佐竹さんはあの一件、どう思いました？」
「……。あれで言霊も納得したんだから、いいんじゃないの？」
少しの沈黙もつかの間、あっけらかんと佐竹さんは言った。
「まぁ、そう言っちゃえば終わりですけど、彼女の願いは本当は……。」
「ま、確かにあれは妥協だよね。」
隠しも偽りもしない、佐竹さんの言葉に千歳は顔を曇らせる。
「そんな顔しなさんな。確かに彼女の願いを叶えてあげたいと思ったんでしょ？」
「はい……。でも、それは……。」
「難しいかった。と言うより不可能だった？」
佐竹さんは机の向こうから応接セットのソファーに座る千歳の向かいに回った。
そして沈黙する千歳に言う。
「ある所に二人人がいて、片方は片方が嫌いだった。」
「……？」
「そしてその片方は片方を虐めた。見兼ねた第三者が虐めを辞めさせた。」
佐竹さんは立ち上がってコーヒーを入れ始めた。
コーヒーの香りが相談所一杯に広がる。

「でも、虐めは終わっても、片方の片方に対する嫌いってキモチは消えない。」
「……！」
千歳の瞳が大きく見開かれるのを佐竹さんは気付かなかった。
「確かに嫌いじゃなくなれば一番いいのだけど、なかなかそうは行かないよ。今回のことはそれに似てる。」
「……だ、から、妥協、する……んで、すね。」
掠れ、途切れた声で千歳は言う。
「まぁ、仕方がなかったんだよ。その辺、千歳ちゃんの言ったことは良かったんじゃないかな。」
生きてく上で妥協は仕方がない。大切なのは、満足の行く譲歩が出来るかだよ。と佐竹さんはいいつつ、コーヒーを運んだ。
「……満足の行く譲歩、ですか。」
千歳は何だか淋しい気持ちになった。
本当に欲しいものに手が届かず、別のもので満足する。
それでいいの？わたしは……それで？
「これは、一つの考えだから、あんま捕われないで、これ飲んで落ち着いて。」
一応の断りを入れた直後、佐竹さんの足がフォルダの山にぶつかる。
「え、」
「あっ、さ……」
がちゃん、ばさっ、びしゃあ、みたいな音が一緒くたに鳴り、佐竹さんは転げ、近くのフォルダやファイル、書類の山がコーヒーに浸った。
「佐竹さん、大丈夫ですか？！」
慌てて雑巾を取りに行く千歳を、破片に気をつけて…、と弱々しく見送ってから、佐竹さんは絶叫した。
「まずい！書類！どうしよ……！」
春先の空は青く澄んで、人々が笑い合って、生きていた。

Ｆｉｌｅ１－３：日本語の乱れ～後編～（後書き）

やっと終わりました！学年末テストが！ここ一週間わたしの生活はテストに侵略されていました。毎日毎日勉強勉強……。わたしは問題を解きました。間違えました。解答を見ます。「先生、解答の言ってる意味が解りません……」わたしは別の問題を見ました。反応熱がどうとか、燃焼熱が、反応物、生成物……。わたしは諸手を挙げます。「先生、問われている意味が解りません……」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6595d/

不思議不可視議相談所

2011年1月27日08時25分発行